

長楽寺納骨堂

正会員 山本良介 君

最寄りの陶駅からのアプローチは、長楽寺に近づくにつれ長閑な田園風景へと変わり、散在する民家と畑の合間を縫うように折れ曲がる緩い登り道である。視界が開け畑越しに見える長楽寺の第一印象は、2つの対比的な屋根のバランスの良いコンポジションであった。既存本堂の形式的なてり屋根と、それより低く抑えられ優しい印象をあたえる納骨堂のむくり屋根の対比が、徒歩で近づいていくに連れて関係性を変えながら様々な顔を見せてくれる。十分に近づくと、納骨堂の屋根の上に天女が舞っていることに気がつく。

従来の納骨堂のような死者のための静かで厳かな空間ではなく、檀家の人々が集い、舞い、奏で、死者と生者が共に演じるような、非日常的な浮遊感のある舞台というユニークな発想に基づいて計画されている。そのため、本堂西側に面する納骨堂の正面は全面開放することが可能で、内陣と礼拝はステージに、本堂と納骨堂の間の庭は観客席へと早変わりする。死者が忘却されてしまうような暗く狭い空間ではなく、生者も入りたくなるような明るく軽やかで開放的な空間になっている。

木造の架構は、この計画によく整合した開放的な明快さとディテールの楽しさを併せ持っている。けやきの自然木を一方に使った非対称な二本の柱で棟木を支え、そこに二重の垂木をかけて屋根面を構成している。建物外周では二重柱に勘合させた天秤状の腕木を介して屋根を支え、二重柱の間にガラスを嵌め込むなど、伝統的な形式の中に現代的で独創的なディテールが融合されている。屋根面は3分割され両端部の棟木の傾斜と垂木上のリブにより、柔らかいむくり屋根の3次元形状をシンプルに作り出している。75×100の小断面の二重垂木は、架構を屋根面から浮かせて見せ、非常に軽快な印象を与えることに成功している。長方形断面の上段と下段の垂木の間にはスペーサーとして輪切りにした130φの丸太が挟み込まれ、構造的な役割を果たすだけでなく、設計者の遊び心を感じさせ、見上げた時の印象をより軽やかで楽しいものになっている。このスペーサーは、南北面では、そのまま屋外まで突出し、棟母屋になり、木造で常に問題となる主架構と直角方向の構造の跳ね出しをどうするかという問題を、見事にしかもさり気なく解決している。

このような新しい納骨堂の提案が実現するには施主との信頼関係が不可欠で、その良好な関係とこの作品への思い入れが、設計者自身がこの納骨堂に入る予定であるという点からも感じられた。作品を現地を見て、こんな納骨堂なら死後入りたいと確かに思えた。

以上のように、本作品は、外部空間と内部空間が一体に使われることを想定し、開放的で日常的な活動の場として地域の人々の集いの場となる新しいお寺の空間を提案し、意匠・構造・工法が不可分に調和した完成度の高さと、設計全体にわたってのオリジナリティがバランス良く融合している点が、特に優れていると評価した。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。